OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	メタフュシカ　第49号　彙報
Author(s)	
Citation	メタフュシカ. 2018, 49, p. 161-167
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/71252
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【彙報】

○　哲学哲学史・現代思想文化学

〔研究室について〕

現在（2018 年 11 月 5 日）、学部の哲学・思想文化学専修には 27 名が在籍している。大学院の哲学哲学史専門分野には博士前期課程に 2 名、同後期課程に 12 名が在籍しており、現代思想文化学専門分野には博士前期課程に 5 名、同後期課程に 9 名が在籍している。また、哲学哲学史専門分野には入江幸男教授、舟場保之教授、嘉目道人特任講師、三木那由他助教が所属しており、現代思想文化学専門分野には須藤訓任教授、望月太郎教授、中村征樹准教授（兼任）が所属している。

本年度の講義・演習は以下の通りである。入江教授「論理学初級（1）・（2）」、（嘉目特任講師と共同）「問答の観点からの哲学」。舟場教授「カント『永遠平和のために』を読む I・II」、「カント実践哲学の諸問題について」、「ドイツ哲学基本文献講読 I・II」、「J・ハーバーマスの思想 XI」。嘉目特任講師「フィヒテ『知識の哲学』を読む（1）・（2）」、「ウィトゲンシュタイン『哲学探究』を読む（1）・（2）」。須藤教授「ニーチェの『ツァラトゥストラ』（8）・（9）」、「ハイデガー研究（8）・（9）」、「現代哲学史概説」。望月教授「デカルト＝エリザベト往復書簡を哲学カウンセリングの観点から読む」、「発展途上国における教育開発のための哲学プラクティス」、「鶴見俊輔の思想形成と『悪』の問題」、「市民とは誰のことか、群衆とは誰のことか」。中村准教授「『知の理論』と科学」（江口太郎氏と共同）、「科学的知の政治学：『Agnotology』を読む」、「技術論と技術の哲学」。そのほか、本研究室のリレー講義「西洋哲学通史（クザーヌスから現代まで）」（仏文研究室山上浩嗣教授協力）が開講されており、また、例年通り、各教授ないし准教授ごとに、学位論文執筆のための演習が実施されている。

なお、非常勤講師の方による講義として金彗氏「ハンナ・アーレントの政治哲学」が開講されている。また他部局の教員による講義として、言語文化研究科の Malik Luke 特任准教授が「20 世紀の心の哲学とそれを超えて」を開講している。

研究室の成果発信として、本機関誌『メタフュシカ』と欧文機関誌 *Philosophia OSAKA* を毎年刊行している。同欧文機関誌の前年度号には、当研究室から以下の論文が掲載された。言語文化研究科 Luke 特任助教“Category Mistakes: A Definition and Consideration of Their Meaningfulness”、入江教授“Question and the Meaning of Identity Sentences”、舟場教授„Nationalismus und/oder Potenzialität des Weltbürgerrechts bei Fichte“、嘉目特任講師“On the Precedence of the First-personal Point of View in Contemporary Kantian Moral Arguments”。また、大阪大学文学会編『待兼山論叢』哲学篇を通じても、毎年、研究成果を発信している。同誌の前年度号には、当研究室から以下の論文が掲載された。藤田助教「フーコーの身体概念」、天野恵美理（現代思想文化学博士後期課程）「ベルクソンにおける外界についての一考察――『意識の直接与件についての試論』から『物質と記憶』第四章にかけて」、朱喜哲（哲学哲学史博士後期課程）「ジェノサイドに抗するための、R. ローティ「感情教育」論再考」。なお、研究室公式ホームページ（http://www.let.osaka-u.ac.jp/

philosophy）および YouTube 公式チャンネル videometaphysica1 を通じても、研究教育活動の関連情報を随時発信している。また研究室の活動基盤として、研究会 handai metaphysica を主催している。

研究室の関連催事として、2017 年 11 月に、UNESCO「世界哲学の日」記念イベントとして、上野修名誉教授による講演会「ノンヒューマンなものになること、あるいは人間であることの偶然性」を開催した。同年 12 月に handai metaphysica 特別研究例会としてネブラスカ大学 Halla Kim 教授を招き、講演 “How is the Corruption of the Will Possible? -Kant on natural dialectic and radical evil-” をおこなっていただいた。2018 年 2 月に嘉目特任講師が、人文・社会科学横断若手研究者ワークショップ「社会における言語使用としてのヘイトスピーチ Vol. 1」を、和泉悠氏（南山大学）、大塚生子氏（大阪工業大学）、柳田亮吾氏（大阪大学）、明戸隆浩氏（関東学院大学）を招いて開催した。また同特任講師の招へいのもとで、同年 3 月 1 日から 2 日にかけて、Mario Jorge de Carvalho 教授（リスボン大学）によるカント・フィヒテ哲学についての連続講演会をおこなっていただいた。同年 3 月に、舟場教授が代表となっている科研費基盤研究（C）「カントの平和論を現代の議論に接続し新たな提言を行うための理論的研究」のもとで第五回大阪哲学ゼミナールが開催され、以下の発表が行われた。斉藤拓也（北海道大学教授）「カントにおけるパトリオティズムとコスモポリタリズム」、舟場保之（大阪大学教授）「フィヒテにおけるナショナリズムと世界市民法の可能性」、寺田俊郎（上智大学教授）「健全なナショナリズムのために――日本の現状を直視しつつ」、御子柴善之（早稲田大学教授）「カントの道徳的世界市民主義――「道徳性」概念の再検討から――」。また同ゼミナールにおける金彗『カントの政治哲学』合評会では、石田京子（慶應義塾大学助教）と舟場保之（大阪大学教授）がコメンテーターを務めた。同年 7 月には、日本－ASEAN グローバル哲学研究交流ラボラトリー（大阪大学国際共同研究促進助成金タイプ B、平成 29 年度採択）のもと、望月教授の招へいで、Kasem Phenpinant 准教授（チュラロンコン大学）に京都大学にて講演 “Hospitality as the Acceptance of the Others: Recasting the Ethics of Deconstruction” を、またさらに 8 月には大阪大学にて講演「タイで哲学するということ」をおこなっていただいた。同年 9 月には舟場教授が第 6 回大阪哲学ゼミナールを開催し、デュースブルク－エッセン大学のアンドレアス・ニーダーベルガー教授を招いた。また同月には三木助教が首都大学東京およびジュネーヴ大学の Paolo Bonardi 氏を招き、第 24 回 handai metaphysica 特別講演会 “Millianism, Nonexistence and Classical Logic” を開催した、（2017 年 11 月～ 2018 年 10 月の 1 年間に実施されたものを記載。以下も同様）。

そのほか、院生主催の研究会が定期的に開催されている。2017 年 6 月に第 15 回哲学ワークショップが開催された。そこでは、以下の発表がおこなわれた。仲宗根勝仁「クリプキ以降の指示の概念の批判的検討」、垣本伊守幹（現代思想文化学博士前期課程）／中村文彦（同博士後期課程）「専門知の多様性と社会」。

〔教員について〕

入江教授が、2018 年 5 月にソガン大学（韓国）にて口頭発表 “Meaning as Role in Question-

Answer-Inferences: Beyond Robert Brandom's Inferential Semantics" をおこなった。同年 8 月 17 日に第 24 回世界哲学大会（北京）にて口頭発表 "Question-Answer Inference" をおこなった。

舟場教授が、2017 年 11 月 12 日に明治大学にて開催の日本フィヒテ協会第 33 回大会にて、口頭発表「「内的国境」論と世界市民法」をおこなった。2018 年 2 月には、論文「コミュニケーション論の現代的意義――カントとハーバーマス――」が収録された牧野英二編『新・カント読本』（法政大学出版局）が刊行された。2018 年 6 月にデュースブルク＝エッセン大学（ドイツ）にて Blockseminar "Zur Idee der Weltrepublik in der politischen Philosophie bei Kant, Karatani und Habermas" をおこなった。

嘉目特任講師が 2017 年 11 月に明治大学で開催された日本カント協会第 42 会大会にて口頭発表「討議倫理学におけるフィヒテ的アプローチ――「当事者性」と「普遍」を手掛かりとして――」をおこなった。また 2018 年に論文「討議倫理学におけるフィヒテ的アプローチ――「当事者性」と「普遍」を手掛かりとして――」（『日本カント研究』第 19 号 104-120 頁）を刊行した。また同年 8 月に第 24 回世界哲学大会（北京）にて、口頭発表 "How should Fichte's Philosophy be Rehabilitated in Contemporary Philosophy" をおこなった。さらに同年 9 月に明治大学でおこなわれた批判的社会理論研究会第 34 回例会において Karl-Otto Apel, "Pragmatismus als sinnkritischer Realismus auf der Basis regulativer Ideen. In Verteidigung einer Peirceschen Theorie der Realität und der Wahrheit" (in: M.-L. Ratters u. M. Willaschek (Hrsg.), Hilary Putnam und die Tradition des Pragmatismus, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 2002, S. 117-147) を紹介した。

三木助教が 2018 年 4 月に着任した。同年 10 月に立命館大学にて開催された日本科学哲学会第 51 回大会にて口頭発表「意図の無限後退問題とは何だったのか」をおこなった。

望月教授が、2018 年 8 月に開催された The 4th Conference on Contemporary Philosophy in East Asia（國立政治大學、台湾）にて口頭発表 "Philosophy of Corruption" をおこなった。

中村准教授が、2017 年 11 月に科学技術社会論学会第 16 回年次研究大会（九州大学）にて講演「戦後の石炭政策と産炭地」をおこなった。同年 12 月には第 37 回日本看護科学学会学術集会（仙台国際センター）にてパネルディスカッション「領域を超えた若手研究者の討論会：未来を見据えた研究を進めるための創造・想像的提案に向けて」に登壇した。2018 年 7 月には日本学術会議公開シンポジウム「若手アカデミーが考えるシチズンサイエンスに基づいた学術横断的社会連携」で、講演「シチズンサイエンスは学術研究をどう変えるか」をおこなった。さらに 2018 年に出版された児玉善仁ほか編『大学事典』（平凡社）にて、「サイエンスカフェ」、「先端科学・技術」、「知識基盤社会」（分担執筆）の項目を担当した。

藤田助教が、2018 年 3 月に中村准教授主催のもと、講演会「主体化の哲学のために――ミシェル・フーコー研究』をおこなった。同月 31 日に任期満了退職となった。

〔学生について〕

哲学哲学史専門分野は以下の通りである。博士後期課程の阿部倫子が 2018 年 8 月に北京で開催された第 24 回世界哲学大会にて、口頭発表 "Compossibility of a World and Contingency of the

Best Possible World in Leibniz” をおこなった。博士後期課程の立花達也が研究発表「人間はいかにして「擬人化」されるのか」（2018 年 3 月、第 16 回哲学ワークショップ、大阪大学）をおこなった。博士後期課程の朱喜哲が以下の口頭発表をおこなった。「データによる正当化と推論主義」（2017 年 11 月、第 50 回日本科学哲学会、東京大学）、「推論主義からみた統計的因果推論――規範的語用論における因果性の取り扱いに向けて」（2017 年 12 月、京都推論主義ワークショップ、京都大学）、「ウィルフリッド・セラーズの規範性概念とその受容」（2018 年 6 月、アメリカ哲学フォーラム第 5 回大会、神戸大学）、「ブランダムの単称名辞論とその射程」（2018 年 7 月、2018 年度哲学若手研究者フォーラム、国立オリンピックセンター）。2018 年 4 月には矢田部俊介氏（西日本旅客鉄道株式会社）、大西琢朗氏（京都大学）とともに応用哲学会第 10 回年次研究大会（名古屋大学）にて、ワークショップ「論理学の哲学と推論主義」を開催した。博士後期課程の仲宗根勝仁が以下の口頭発表をおこなった。「意味の所在――意味論的内在主義と外在主義の論叢」（2017 年 12 月、哲学 Dynamite !!、上智大学）、「意味論的内在主義と外在主義的直観の調停」（2018 年 5 月、日本哲学会第 77 回大会、神戸大学）。また 2018 年 7 月に小山虎編『信頼を考える――リヴァイアサンから人工知能まで』（勁草書房）が刊行され、第 12 章「ヘイトスピーチ――信頼の壊しかた」（281-304 頁）を和泉悠氏（南山大学）とともに、博士後期課程の朱喜哲、仲宗根勝仁が執筆した。

現代思想文化学専門分野は以下の通りである。博士後期課程の天野恵美理が 2018 年 9 月の日仏哲学会 2018 年度秋季大会にて口頭発表「「イマージュ」を跡付ける」をおこなった。博士後期課程の西村知紘が 2017 年 11 月 11 日に口頭発表「ハイデガーにおける語りと言明」（日本現象学会第 39 回研究大会、大阪大学）をおこなった。

また哲学思想文化学の学部生岩本智孝が 2018 年 2 月に、平成 29 年度「学部学生による自主研究奨励事業」の成果として研究発表「日本近代精神史：詩人中原中也の哲学と芸術論」をおこなった。

（三木）

○　臨床哲学

〔研究室について〕

本年度の在籍者は、学部生 21 名、大学院生 10 名（前期課程 3 名、後期課程 7 名）、外国人留学生（研究生）2 名。このうち 3 名が未来共生イノベーター博士課程プログラム院生である。浜渦辰二教授が 2018 年 3 月をもって定年退職、4 月から小西真理子講師が着任。堀江剛教授、ほんまなほ准教授（兼任）、小西真理子講師、およびコースアシスタントの各スタッフが、哲学哲学史・現代思想文化学の教員と連携しつつ、教育・研究活動に従事している。

授業として、講義は「コミュニケーションの哲学」（堀江）、「ケアの倫理と臨床哲学：精神病理と交わる現代社会の諸問題」（小西）、演習は「スピノザを読む」（堀江）、「フェミニズム哲学を読む」（ほんま）、「ギリガンを読む」（小西）のほか、教員 3 名の合同による「倫理学概論」「p

meets P」、「倫理学の研究方法」（学部生中心）、「臨書哲学研究」（大学院生中心）、また学部生・大学院生のみならず社会人参加も受け入れた「ひろば臨床哲学」を行った。CO デザインセンター開講科目として、ほんま准教授による授業「哲学対話入門」「マイノリティ･ワークショップ」「哲学対話進行法」「当事者との対話」「マイノリティ・セミナー」も行われた。さらに本年度も、マイケル・ギラン・ペキット非常勤講師に「Ethics in English」の授業していただいた。

哲学哲学史・現代思想文化学専門分野とともに、機関紙『メタフュシカ』第 48 号（2017/12）を刊行、臨床哲学の院生 2 名の論文が掲載された。研究室の雑誌『臨床哲学』第 19 号を、2018 年 3 月に WEB 上で刊行した。

臨床哲学研究室の企画として「東アジア哲学会議：現象学・臨床哲学・倫理学を繋ぐ」を開催（2018/1/29）、以下の発表を行った。廖欽彬（中国･広州中山大学副教授）「京都学派と臨床哲学：木村敏を手掛かりに」、林遠澤（台湾国立政治大学教授）「精神保健看護におけるリカバリーモデルの構築と基礎づけ」、浜渦辰二（大阪大学教授）「現象学・臨床哲学・倫理学を繋ぐ試み」、汪文聖（台湾国立政治大学教授）「叙事治療的理論探討」、許樹珍（台湾国立陽明大学教授）「精神障害者の家族におけるケア時間流の現象についての考察」、川崎唯史（国立循環器病センター流動研究員）「傷つきやすさの概念：臨床研究の倫理とフランス現象学をつなぐ」、ほんまなほ（大阪大学准教授）「臨床哲学とフェミニズム」。また立正大学文学哲学科（田坂さつき研究室）との共催で「ダイバーシティ＆インクルージョン・プロジェクト：ALS 患者さんに聴こう」を開催した（2018/10/13）。

〔教員について〕

浜渦教授は、最終講義「現象学・臨床哲学・倫理学を繋ぐ」（2018/3/9）のほか、研究・社会活動として以下のものを行った。著書・編著書：『北欧ケアの思想的基盤を掘り起こす』（大阪大学出版会、2018/2）、『可能性としてのフッサール現象学――他者とともに生きるために』（晃洋書房、2018/3）、『On Development from Husserl's phenomenology-Between Phenomenology of Intersubjectivity and Clinical Philosophy of Caring-』（大阪大学大学院文学研究科紀要、2018/3）。研究発表･講演:「日本における終末期ケアの現場」（2017/11/28､ハイデルベルク大学翻訳通訳学科）、「Zwei Wege der klinischen Philosophie in Japan」（2017/12/5、ハイデルベルク大学日本学研究所）、「Die Begriffe, Verhältnis,'Amae' und 'Aida' im Vergleich」（2017/12/7、ハイデルベルク大学精神医学教室・ヤスパース研究所）、「意思決定支援について」（2017/12/16、庄内地域包括支援センター）、「Phenomenology, Clinical Philosophy and Ethics」（2017/12/22、ソウル大学）、「日本における終末期ケアの現状」（2018/2/14、東京大学死生学・応用倫理センター）、「看護の原点について考える」（2018/2/24、静岡県訪問看護ステーション協議会）、「大阪大学での 10 年間を振り返る：「ケアの臨床哲学」研究会がめざしたこと」（ケアの臨床哲学研究会､2018/3/31､中之島センター）。論文:「フッサールにおける「できる／できない」の現象学」（哲学論叢刊行会『哲学論叢』第 44 号、2017/12）、「On Dis/Ability in Husserl's Phenomenology」（『臨床哲学』19 号、2018/3）、「間身体的表現と認知症の主観性」（ストックホルム大学准教授 Lisa Folkmarson Käll による論文の青木健太と

の共訳及び解題、同上)、「北欧ケアの思想的基盤を掘り起こす：活動報告」(池田喬・合田正人・志野好伸共編『異境の現象学――〈現象学の異境的展開〉の軌跡 2015-2017』、2018/3)。

堀江教授は、研究・社会活動として以下のものを行った。著書：『ソクラティク・ダイアローグ：対話の哲学に向けて』(大阪大学出版会、2017/12)。小論：「哲学する装置：ソクラティク・ダイアローグ」(『環境会議』秋号、2018/9、178-183 頁)。研究発表：「Philosophy as a Therapy: Spinoza and Philosophical Counseling」(International Conference On Philosophical Counseling & Therapy、2017/12/2、韓国江原大学)、「「医療の組織倫理」という視点」(服部俊子・大北全俊・樫本直樹との共同ワークショップ、第 10 回応用哲学会、名古屋大学、2018/4/8)、「哲学する装置：ソクラティク・ダイアローグ」(第 1 回日本哲学プラクティス学会、2018/8/26、明治大学)。その他：代表を務める科研「組織における価値の働きに関する臨床哲学的研究」として、組織倫理研究会を 2 回 (2018/2/3-4、8/17-18) 開催。哲学対話 (SD) 進行役として、対話セミナー (患者のウェル・リビングを考える会、神戸生活創造センター)：体験を語る (2017/9/2)、例を吟味する (同 12/9)、答えを探る (2018/3/17)、対人援助職のための哲学対話ワークショップ (地域女性支援アリアドネの会、2017/12/4)、人工知能の医療応用を見据えた医療の専門性に関する質的研究 (JST 戦略的創造研究推進事業：人と情報のエコシステム、2018/1/13-14、8/11-12)、仕事と価値 (上記科研、2018/5/12-13、10/20-21)、人の言ったことが「分かる／分からない」とはどういうことか (神戸市医師会兵庫区医療介護サポートセンター主催、2018/10/28)。哲学カフェ進行役として、まちなか風がんカフェ／メディカルカフェ (患者のウェル・リビングを考える会、神戸市公共施設各所)：インフォームドコンセント (2017/9/16)、語り (同 11/4)、食べるということ (同 11/18)、治験 (2018/1/20)、救急車呼びますか (同 2/10)、耐えがたさ (同 3/3)、ターミナルケア (同 6/30)、家に帰りたい (同 9/15)、孤独・孤立・ひとり (同 10/7)。学内／外授業として、「科学技術と倫理問題」(リベラルアーツ教育プログラム：生命科学と倫理をめぐる知性と感性、2018/6/9、武庫川女子大学)、「脳死・臓器移植の倫理、終末期医療の倫理」(大阪大学医学系研究科 (医の倫理と公共政策学教室) 医療倫理概論、2018/7/22)。

小西講師は、研究活動として以下のものを行った。研究発表：「The Psychologically Dependent Person in an Ethic of Care: Considering the Pathological Situation」(24th World Congress of Philosophy、2018/8/14、北京)、「Encountering the Race Issue as Japanese」(人種差別の現象学研究会：ヘレン・ンゴ『人種差別の習慣』合評会、同 8/24、立教大学)。社会活動：「「ケア」から／を問い直す：エヴァ・キテイ『愛の労働』を起点として」(〈ケア〉を考える会、2018/10/14、京都)。

〔学生について〕

以下の大学院生が博士学位を取得した。前原なおみ「老衰死という現象」、永浜明子「ひととひととの関係からみた自閉症スペクトラム――アスペルガー症候群と診断された青年との歩みから――」、日髙悠登「わが国における看取りへの視座――宗教者によるケアの臨床哲学的探求から――」、山口弘多郎「フッサール『危機』における公式の意味の問題」、正置友子「メルロ＝ポンティと〈子どもと絵本〉の現象学――子どもたちと絵本を読むということ――」、中川雅道

「探求のある風景――Philosophy for Children について考えたこと――」。中西チヨキ「創造としての語ること聴くこと――病いの子どもとともに生きる母の体験をとおして――」。

以下の論文を執筆した。小泉朝未「ダンスワークショップで実現する表現の考察」(『メタフュシカ』48 号、2017/12)、竹内幸子「精神科病院での集団音楽療法を考える：関係し合う時間の中で」(同雑誌)。永浜明子「わたしの考える「臨床哲学」と「当事者研究」(『臨床哲学』19 号、2018/3)、前原なおみ「看護師にとって老衰死とはどのようなものか：「祝い樽斗の菓子箱」看護師 B さんの語りから」(同雑誌、研究ノート)、三ツ田枝利香「ひとりの人が自宅で暮らす中で“食べられなくなっていくこと”について考える」(同雑誌、活動報告)。小泉朝未「共生とアートの接点：コミュニティダンスの考察から」(『未来共生学』5 号、2018/3)、高原耕平，Concentric Circles of Guilt in R. J. Lifton's Survivor Study(『グローバル日本研究クラスター報告書』1 号，2018，pp.61-72)。また小論として、高原耕平「災害で死ぬということ：北大阪地震の内側から」(『WEBRONZA』、2018/6/22)。

以下の研究発表を行った。三ツ田枝利香「ひとりの人が自宅で暮らすことを支える：訪問看護師としての体験より――」(第 95 回臨床実践の現象学研究会、2017/11/4)、高原耕平「R. J. リフトンのサバイバー研究における「罪責感の同心円」理念の倫理学的可能性」(関西倫理学会、同 11/19)、「証言構造としての〈傷〉：阪神淡路大震災期復興住宅における外傷的体験の対話と分析」(「傷つきやすさと有限性の現象学」第 7 回研究会、2018/5/3、國學院大學)、「アウグスティヌスと PTSD：記憶を語りなおすということ」(第 38 回大阪大学医療人文学研究会、2018/8/22、大阪大学)、桂ノ口結衣「哲学対話において「発言はしなくても OK」か？：オスカル・ブルニフィエの哲学プラクティスから」(日本哲学プラクティス学会第 1 回大会、2018/8/26、明治大学)。小川長「経営における「ケアの倫理」の可能性」(経営哲学学会第 35 回全国大会、2018/8/31、慶應義塾大学)。

(堀江)